

国立公文書館の機能・施設の在り方に関する基本構想

※保存・利用支援等WGに特に関連する項目。

(保存・修復機能)

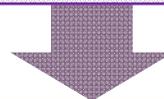
- ① 受入れ文書の拡大や利用の増加にも対応し得る書庫の整備
- ② 適切かつ効率的な保存環境の確立及びバックアップ設備の整備
- ③ 修復のための設備の充実と体制強化
- ④ 保存・修復に係るセンター機能の確立

(調査・研究支援機能)

- ① 快適で利便性の高い閲覧室の整備と出納システム等の合理化
- ② 利用者が調査研究を深めるための設備の充実
- ③ 充実した利用サービス提供による来館利用の付加価値向上

(デジタルアーカイブ機能)

- ① 修復と連携したデジタル化の拠点の整備
- ② 我が国全体としての歴史資料のデジタルアーカイブ化の推進



WGにおける議論

関連する主な諸室

- ・書庫
- ・修復施設
- ・閲覧室
- ・デジタル化施設

※ これらの附帯施設等も含む。

- 新たな施設の整備を視野に入れた今後の活動の展開の在り方。
(修復とデジタル化の連携、幅広い層の利用を意識した調査・研究支援等)
- 新たな施設において関連諸室が備えるべき機能・設備。
(書架形式の在り方、温湿度管理の在り方等)

などについて、国立公文書館からの現状と今後の取組、新たな施設における関連諸室に関する要望等の説明を踏まえ、議論。

○保存・修復機能関連

(書架形式)

- ・資料の劣化状況や形態に応じ、固定書架と集密書架の併用を考えるべき。自動書庫は費用面、収納の効率性等の面においてマイナスのポイントが高く、相当の利用頻度や出納量が担保できなければ導入しない方がよい。
- ・システムの老朽化、機械の故障などを考えた場合、自動書庫以外の形式の方がより安定的で持続的な仕組みがつかれるのではないか。
- ・自動書架の検討をする場合は、それぞれの大きさのコンテナに合った資料がどれだけあるか把握するため、どの程度の大きさの資料がどの程度あるかの積算が求められる。
- ・水の配管と書庫との関係を考えるべき。

(保存環境、消化設備)

- ・紙、マイクロフィルム、デジタルCD・DVD、フィルム、音声テープ等の多様な記録媒体に応じた適切な保存環境を確保すべき。
- ・保存環境は空間が大きいほど制御しにくいいため、書庫はある程度区画を区分して考えるべき。
- ・消化設備については、窒素や水などの人間の耐性が強いものを使用している例も参考に、人命と資料の維持保存という観点について説明できるようにすることが必要。

(その他)

- ・資料保存全体を総括し、方針と計画を立てるようなマネジメントの専門職や部門を設けるべき。
- ・劣化状況等の基礎調査による適切な優先度判断に基づき、積極的、計画的に修復とデジタル化を進めることが必要。
- ・記録媒体の研究、保存・修復のための素材の研究等、資料の保存・修復に関する研究開発機能を国立公文書館に備えるべき。

○調査・研究機能関連

- ・利用者が心地よく利用できるよう、滞在し閲覧するに当たっての空間の快適性にも配慮すべき。
- ・例えば期間限定のラボとしての活用等、海外も含めた外部の研究者が利用しやすい環境を整え、歴史研究その他の活動の拠点になっていくことができればよいのではないか。
- ・レファレンスカウンターの充実も重要。海外の施設では外国人に配慮した待遇をしているところもあり、こうした例を参考に外国人にも対応できるとよいのではないか。
- ・展示を見に来た来館者などが閲覧室を利用する経験を積めるような中間的な機能・施設があるとよいのではないか。

○デジタルアーカイブ機能関連

- ・二次バックアップ体制の検討が必要。
- ・修復のプランニングとデジタルアーカイブ化のプランニングは、流れを一致させることが重要である。

○施設全体の方針

- ・地球環境への配慮、ランニングコストの低減、利用者や職員の快適性や安全性の確保などの観点も、施設建設に当たってもポリシーとして考えるべき。
- ・湿度による生物被害、カビの発生防止のため、断熱性の確保によって建物全体として外と中の温度差をできるだけ生じさせないようにするとともに、建物内部においても隣接する空間の温度差を小さくするよう配慮し、結露が生じないようにすべき。
- ・資料（受入れから利用まで）と人（利用者、職員、見学者）の流れに配慮した機能と空間の配置にすべき。